

女性であること

森本 晃子

橋本病院(徳島県阿南市)助産婦

私が助産婦になろうと思うきっかけを作ってくれたのは、看護学校を卒業してフレッシュナースとして配属された小児病棟で出会ったお母さんたちでした。

小児病棟には、さまざまなお母さんがいました。内臓破裂、鎖肛、口唇口蓋裂、巨大結腸症の児をかかえたり、未熟児を出産したお母さんたち。

まだ未熟で世の中の理不尽な事柄に立ち向かう手段を十分に会得できていなかった私の眼には、そのお母さんたちが痛々しく、また哀しく、映りました。そのお母さんがたにどのようにかかわっていけばよいのか、どのようなフォローが最適なのだろうかと、ただ思いもがく日々が続きました。そして、選んだ道が助産婦でした。まず自分という器を大きくすることが必要と感じたのです。そうすることで、悩み、苦しみ、哀しみ、理不尽な扱いに立ち向かっている女性たちにかかわっていかれる方向が見つかるのではないだろうかと考えたのです。いや、その前にいまの自分のままでは仕事は続けられない、脱出口は助産婦になることだという思いでした。

あれから24年。助産婦になってからも、どこで女性にかかわることが私の生きざまを現わすことにつながるのだろうと、義務教育あるいはターミナルの場だと、職業の流浪をしてきました。

今、私は母性の場で働いています。あい変わらず女性たちは悩んでいると思わずにいられません。病院ですから、もちろん痛み、痛みをかかえる方々が訪れる所であるゆえではありますが。

まず性に関することですが、望まない妊娠をしてしまった女性に出会います。十代の妊娠はもと

より、未婚で、あるいは家族計画の失敗で、また産み終わりから閉経までの期間に妊娠したというケースまで、受診後妊娠を知らされて思わぬできごとに涙ぐむその心はいかばかりかと思わされます。産めないこと、経済的なこと、身体のこと、児のこと、あらゆることが一度に頭をよぎるのでしょう。

この涙の重みを男性はわかってきているのだろうかといつも思われます。無理かもしれない、無理だろう、そんな思いです。そして女性たちには、まず自分の身体を知ってほしいと思います。いつが妊娠しやすいのか、妊娠するには時があることに気づいてほしい、そして相手に伝えてほしい、私の身体のサイクルはこうですと。ただ男性の意のままに流されるのではなく、本当にお互いに自分の性を知りあうこと、理解しあうこと、大切にしあうこと、このことがすべての基本になると伝えたい。何を譲れて何を譲れないのか、命を守るその点に立って考えるべきであらうと伝えたいのです。

ライフサイクルに関しても女性のかかえる問題はさまざまです。結婚・出産・育児などによって、ライフワークの変更を余儀なくされたり、逆にルーチンワークが増えたりするのは、まだまだ女性側に多い現実です。妊娠・出産はもちろん女性という性の特性に根ざしたものです。男性と女性、共に一度きりの人生に変わりはないのですから、かつての慣習に流されることなく、自分を見つめ、自分の考えをしっかりと出せる女性、人間でありたいと思います。私は助産婦として女性にかかわりながら、そのことを伝えていきたいと思います。